

女性同窓生エッセイ一期一会  
第13回 土屋浩子さん（74期）

上田高校も現在は男女ほぼ同数となっているようですが、私達のころはまだ各クラス女子は6~7人が普通でした。そんな中、74期の女子について、衝撃が走ったようです。曰く「女子が10人のクラスがある！」と。そう、私の7組は9人、隣の8組は10人の女子でした。でも、1~6組は他学年同様に6~7名だったのです。なぜ、このように女子の人数に差が出たのでしょうか？

それは、私達の入学から女子だけ家庭科が義務付けられたからです。つまり、女子だけのクラスを1~3組、4~6組、7・8組と3つ作るために7組8組は女子の数が多く組まれた訳です。

家庭科の授業は急遽作られたプレハブ校舎で染谷高校の先生をお招きして行われました。恐らく女子だけ家庭科を考えられた人たちが想像するような衣食住のスキルを上げるものではなく（実習もありましたが）、家庭とは何か、良い家庭を作っていくにはどのような事が大切か、ひいては女性の生き方まで考える、そのような授業が特徴的だったと記憶しています。そして、先生がしみじみとおっしゃいました。「皆さんがこうして、家庭というものを考えている。その間に、共に家庭を営む存在である男子はああして体育をやっている。このことこそが問題なのです」。そう、女子の家庭科の時間、男子は体育だったのです。先生のお嘆きもよく分かります。現在は男女とも家庭科を履修して、それはとても大切なことと思います。

さて、私の仕事は言語聴覚士といます。一般的には脳梗塞などの後遺症の方の言語リハビリが一番わかりやすいでしょうが、小児から成人まで幅広い需要があり、まだまだ不足しています。数年前に大病をしたこともあり現在は東京と小諸で小児の臨床を細々とやっています。長野県はリハビリ病院が多いため成人の担当は多いのですが小児をやる人はとても少なく、小諸の後任を探せないのが悩みの種です。あくまで男女関係なく一人のセラピストとして相手に接する仕事ですので、この仕事に就いてよかったと思っています。